

【報告】都市に学びを埋め込もう - 一般社団法人ラーニングシティとしま設立の経緯

著者	古新 舜
雑誌名	DHJJOURNAL2020
ページ	87-89
URL	http://doi.org/10.34482/00000114



都市に学びを埋め込もう

-一般社団法人ラーニングシティとしま設立の経緯-

Let's Embed Learning in Our Cities
-Background to the Establishment of the Learning City Toshima-

古新 舜 CONEY Shun

デジタルハリウッド大学 非常勤講師
Digital Hollywood University, Lecturer

新型コロナウイルスの蔓延により、社会の常識が見直されている昨今、個人の就労に関しても、単に利益や効率性を追い求める価値観から、個々人が各々の生きがいややりがいを再確認していくこととなった。社会問題では、孤立が生み出す精神的な問題や自死、大人の引きこもりである「7040・8050問題」が取り沙汰される状況下、中年層の社会人における自己受容感、自己効力感の損失を筆者は問題視している。この問題の背景の一つとして、都市における地域の形骸化を捉える。日々の生活において家庭と職場だけの行き帰りをするのではなく、他者と自分らしく交流できるコミュニティの居場所作り、いわゆる「第3の場所(サードプレイス)」の存在が近年求められている。豊島区を舞台としたサードプレイスの形成を、大人の学びと紐づけて活動していく「一般社団法人ラーニングシティとしま」の設立背景を筆者の地域振興や学びの考えと共に論じていく。

キーワード：第3の場所(サードプレイス)、対話、大人の学び、成人学習理論、キャリアアランジョン

1. はじめに：Withコロナ時代と人生100年時代

「人生100年時代」という言葉が社会に浸透してきた。受動的かつ自己決定のない教育課程、安定・終身雇用を目的とした就労意識、並びに年金だけに依存した余生のセカンドライフという昭和から続いた人生における3ステージモデルは急速な変化を迎えている。2020年はコロナウイルスも相俟って、企業においても各業界が業績の悪化と直面し、新卒の採用を断念したり、社員の解雇や廃業に追い込まれている企業も少なくない。企業内の労働環境や事業内容の見直しが迫られている中で、個人においても既存の仕事のやり方を変容させ、現代社会を生き抜いていくライフデザインを意識していくことが不可欠になったといえる。

社会を俯瞰してみると多様性の考えが広がりを見せている半面、生きづらさや社会的孤立が深刻な問題になっている。これは昭和の時代には当たり前であった近所付き合いや井戸端会議などの人と人とが交わる機会が減少していることが一つの要因であると考えられる。都市が、仕事をこなして自宅に帰り寝るだけという無機能的な機能を果たすだけとなってしまい、疲弊して満員電車で通勤する社会人の姿を見受けるたびに、社会人一人ひとりが自身のアイデンティティを確立できているかを都度々々考えさせられる。現代人は少なからず自分らしさや自己の存在意義を喪失しており、生きる上での自己効力感を失いかけていることは、都市における大きな課題の一つだと考える。そこで、私たち^(注1)は大人における学びの価値を今一度見つけ直し、変化する現代社会に順応しながら、一人ひとりが未来志向で成長できる生き方を生み出したいというビジョンを掲げ、豊島区に一般社団法人を設立することを決意した。

2. サードプレイスと大人の学びとの関係性

2.1 サードプレイスとは？

文字通り、第3の場所を表すサードプレイスは、自宅や職場から切り離された居心地の良い場所を指す。その例としては、喫茶店や本屋、クラブ、公園などが挙げられる。アメリカの社会学者レイ・オルデンバーグ(Ray Oldenburg)は、自身の著書『The Great Good Place』においてサードプレイスを、コミュニティライフを豊

かにするきっかけと捉え、創造的な出会いや対話が生まれる場所であると論じている^[1]。彼は、かつては街に溢れていた庶民の憩いの場、議論の場が20世紀に入り世界中で消滅していることを危惧している。サードプレイスを持つことで、孤独やストレスから解放され、新しい出会いや良好な人間関係を構築し、地域活性に貢献することができることを投げかけている。

日本においても、戦後の高度経済成長期以降、都市は利便性や機能性、効率性を追い求めるがゆえに、人口過多で過密になった生活空間において、心理的な圧迫や人間関係の軋轢が増え、ストレス社会が蔓延したことは言を俟たない。経済が成熟社会になった現在、私たちは見かけの豊かさだけを追い求めるのではなく、人間関係における信頼感や貢献感を培うことで、人との繋がりが絆を深化させ、共同体の一員としての意識や自身の存在価値を高めることができるのではないだろうか。

日本、特に大都市である東京において、会社員がサードプレイスとして活用している場所に居酒屋を挙げることができる。カウンター席で意気揚々と酒を酌み交わしながら、無邪気に会話をしている光景を見ると、微笑ましい気持ちになると共に、彼ら・彼女らはこの場所以外で果たして自分らしい時間を過ごしているのかと歯痒い気持ちになることがある。

2.2 会話と対話の違い

居酒屋で行われている会話に着眼をしてみると、その話題は、「会社がどうこう」「妻/夫がどうこう」「親の介護がどうこう」「一人の時間が多くやることが何もない」などの内容をよく耳にする。日頃なかなか吐き出すことができない個人の感情を吐露する人が多いのではないだろうか。そのネガティブな感情の解放は、一時的には精神的な安らぎに結びつく効果があるであろうが、当人を取り巻く生活状況や職場環境が変わらないまま、また元の日常に戻ることで、直面している問題を解決できずに、再度ストレスを溜め込んでしまい、回帰的に愚痴や不平を吐き出さねばならないという負のスパイラルに陥ってしまうように考える。会話とは発話しやすいシンプルな言語コミュニケーションではあるが、実は会話ではなく、対話の機会を

多く生み出していく意識が、このスパイラルから脱却していく一つの鍵になると筆者は考える。

ここで、会話と対話の違いを考察しておきたい。平田は、『「会話」(conversation)とは、すでに知り合っている者同士の楽しいお喋りのこと』とし、一方『「対話」(dialogue)とは、他人と交わす新たな情報交換や交流のこと』と伝えている^[2]。会話は、その場限りで消化されてしまう一時的な感情の交わりであるのに対して、対話はある題材を基にして双方の考えや価値観の理解を深め、双方の関係性を深めていく未来志向のコミュニケーション手段だと捉える。

私たちは、昭和の時代より教育課程では偏差値を重視した有名大学に合格することが善しとされ、社会人においては有名企業への就職や高収入を得ることが目的化されてしまい、外的な因子を求めた人生設計が社会では一般的であったように考える(現在もまだその名残はあるであろう)。そのような考えの下では、「勉強」はあくまでも人生を「豊か」にするために、社会が暗黙的に決めた目標を到達するためのツールでしかないのである。だが、社会経験を経て、様々な課題と直面し、それを乗り越えていくと、「学び^(注2)」は向き合う課題を解決し、成りたい自分を実現するための成長の機会と捉える発想が増えてくるのではないだろうか。

学びとは、子どものためだけにあるのではなく、人生経験を積んだ社会人においても重要な存在であると考え。人生を主体的に決定していくために、自らの関心と社会の課題を関連付けて、今まで習得した知識や概念を一旦リリースし、学びなおし/学びほぐしを行うことで、自己の視座を高め、自分の役割を明確にし、アイデンティティや自己の価値観、さらには関わる地域に対する関係性をより深めていくことができる。社会人こそが学びの価値を理解し、学び続けていくリカレント教育の発想は、現代社会に必須であると考え。

2.3 VUCA時代における大人の学びの必要性

VUCAとは、Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の頭文字を取った言葉であり、あらゆるものを取り巻く環境が複雑性を増し、想定外の事象が次々と発生するため、将来の予測が困難な状態を指す言葉である。この激動のVUCA時代を自分らしく生き抜くには、自分の専門性を定めスキルを深めていく「絞る」という行為と共に、自身の能力や視野を拡張させていく「広げる」という行為を連続させるサイクルが必要となってくる。

マルコム・ノウルズ(Knowles, Malcolm S)の成人学習理論(図1)では、成人は自立した学習者であると位置付け、成人の学習の準備性は人生における発達段階に応じて生じてくると説明している^[3]。VUCA時代においては、自らのキャリアを周到に計画し、実行するという行動様式は適応しづらいため、「絞る」という行為と「広げる」という行為を連続させるサイクルは、人生において一度きりではなく、同時にそのサイクルが稼働していくことが求められる。

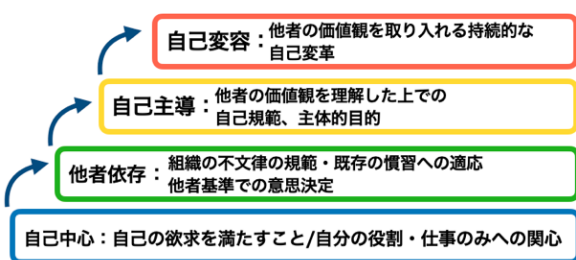


図1：ノウルズの成人学習理論

金井は、人生やキャリアの節目(トランジション)をデザインすることがライフテーマの再創造になることを示唆している^[4]が、トランジションは、ライフスタイルの変化の激しいVUCA社会においては、

次世代を担う若者のみならず、40代、50代の中年層においても必須の発想となる。自身の価値観を再発見し、何かしらの新しいテーマと出会い、そのテーマに関する学びを通して、テーマへの関心・理解や問題意識が醸成されていく。このテーマが再帰的に新たな自身の価値観を形成し、ライフテーマを持続的に変容させていくこととなる。

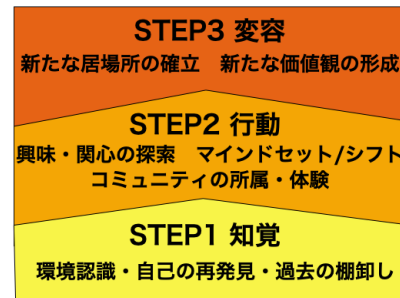


図2：キャリアトランジションの3ステップ

3. 一般社団法人ラーニングシティとしまのミッション

3.1 サードプレイスと大人の学びを紐づけた社会課題の抽出と解決のアンカリング

一つのキャリアを長年続けるのではなく、様々なトランジションを持続的に組み合わせながら、自己変容を生み出していくマルチキャリアによるライフデザインの認知が社会に徐々に浸透していく中で、状況に応じた新たな居場所や新たな価値観を形成していくことで、自己と地域との関係性の意識を高めていくことができると考える。関係者同士の相互行為を通じて、協働でのコミュニティの価値創造を行うことが、さらなる自己成長に繋がり、自ずと個人の生きがいややりがい醸成されていくと捉える。

そのような意識を基にして、前述した対話を軸とした他者との課題の共有化を行い、個人の内面にある考えや出来事といった具体性を抽象化させていき、それにコミュニティ内の知的・人的リソースを掛け合わせていくことで、新たな知識創造が行われ、直面する多種多様な課題を自らで解決していける、具体的な行動指針やモチベーションが生み出されていくのだと考える。

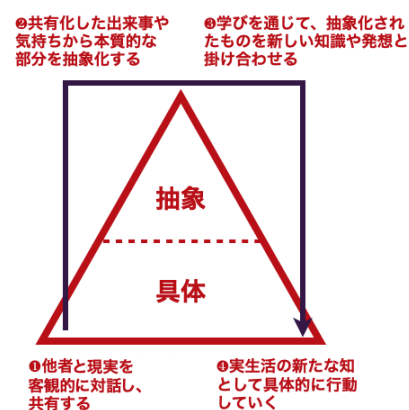


図3：対話が生み出す具体と抽象のプロセス

知識とは、単に個人だけに依拠するものではなく、他者との実践的な協働行為において初めてその価値が萌芽していくものと考え。筆者が代表を務める一般社団法人ラーニングシティとしまにおいても、知識を学術機関や研究室内の机上にだけに留めておくのではなく、実践における場での経験を交えていくことで、生活者と共に生きた知識、生きた学びを共有していき、地域に向けたエンゲージメントと自己のアイデンティティの双方が確立されていくことを目的としている。

3.2 学術的理論の実践の場

産学官連携の政策が長年謳われているものの、諸外国に比べるとそれはまだアドホックな関係性であるように捉える。一般社団法人ラーニングシティとしまの活動においては、学際や臨床における実践家の参画を踏まえながら、その知見を生活者の生活に結びつけていく仕組みを生み出していく。心理学・社会学・リーダーシップ論などのアカデミックなノウハウを生活者一人ひとりが主体的に学んでいくことで、各々が地域での自立的なプレイヤーとして活躍し、生活者同士の協働活動を誘発していきたいと考える。



図4：一般社団法人ラーニングシティとしまが目指す区民と組織との連携

4. さいごに：私たち一人ひとりが地域の主人公であるために

新型コロナウイルスの蔓延も相俟って、時代に大きな変化が訪れている。組織に従属した安定志向のキャリアは消え去り、個人が主体的にキャリアを自己決定する力が全ての生活者に求められている。自分の人生を段階的に肯定していき、失敗を恐れず積極的に行動をしていくことで、社会における協働のあり方が敷衍され、個々の発想力や創造性を大切に開かれた地域が生み出されていくと考える。若者の自死や誹謗中傷の問題が取り上げられる昨今、外的な評価や競争重視の成果主義から脱却をし、各々が自己の人生に向けて感謝ができ、他者を勇気づけ、この世に生まれてきたことへの愛と貢献感が溢れた社会を広げていきたいと考えている。

この活動は次世代に向けて、子どもたちが、この地域、そして、日本に生まれて良かったという感謝と絆の萌芽に繋げるチャレンジだと捉えている。時代は過去には遡れない。未来に一步步踏み出していくことで、私たちの人生は笑顔に溢れる物語に彩られると信じている。

最後に、佐伯の言葉を借りることにする。『学び手が一人ひとり「私の物語」を創り、それが全体として「共同体の物語」となること」^[5]を筆者自らが実践し、豊島区並びに各地域にその物語を届けていきたいと考える。

(注1)

一般社団法人ラーニングシティとしまは、2020年10月20日に代表社員を筆者である古新舜とし、業務執行社員の高澤暢、丸山佐知子の3名で設立予定である。

(注2)

佐伯は「学び」に関して、「本人が主体的に自分から学ぼうという意志をもってなんらかの活動をする」ことと論じている^[6]。受動型の勉強と大人による主体的な学びは意味合いに大きな差異が生まれるため、勉強ではなく学びと表現している。

参考文献

[1] Oldenburg, R.: "The Great Good Place", Marlowe & Company (1989).

[2] 平田オリザ：『演劇入門』講談社 [Kindle版] (1998年)。

[3] Knowles, M.: "Andragogy in Action" Jossey-Bass (1984).

[4] 金井壽宏：『キャリア・トランジション論の展開：節目のキャリア・デザインの理論的・実践的基礎』国民経済雑誌 (2001年), 184(6), 43-66頁。

[5] 佐伯胖：『「学ぶ」ということの意味』岩波書店 (1995年), 204頁。

[6] 佐伯胖：『「学ぶ」ということの意味』岩波書店 (1995年), 3頁。